

# F-1: 産官学金連携

開催日時・会場 9月3日(火曜日) 15:50-17:20 新C303(3階)

## 研究力を伸ばす産学連携の新たな視点

民間資金獲得が大学の評価指標に盛り込まれるなど、民間を含む外部資金の獲得増が大学の喫緊の課題の1つになっている。この点においては、産学連携をいかに加速させるかが重要であり、従来のアカデミア中心の視点ではない取り組みが必要だと考え、「産業界を巻き込んでアカデミアの活性化をしていく」という視点からセッションを構成する。

(株)リバネス・代表取締役社長 COO・高橋氏からは、『産学連携を加速する、科学技術の「橋渡し」人材』と題し、世界に溢れる課題を解決するには、組織や立場・分野を超えて連携していくことが重要であるという考えのもと、祖業である先端科学教育事業を通じて、伝える側の研究者を、課題解決を先導する橋渡し人材「サイエンスブリッジリーダー(SBL)」として育成してきた活動や、そのSBLが生み出した「リバネス研究費」や「テックプランター」など、リバネス独自の事業を通じて生まれた産学連携の事例を紹介していただく。また、アカデミスト(株)・代表取締役・柴藤氏からは、『学術系クラウドファンディングを活用した産学連携の可能性』と題して、資金調達の手法だけではなく、研究広報として、個人／個人間、個人／法人間のマッチングも多数生み出している「クラウドファンディング」の役割に着目し、産学連携におけるその活用方法についての講演をいただき、さらに、各省庁や研究機関の科学研究費助成(ファンディング)情報と研究者情報やプレスリリースを組み合わせた国内最大級の研究課題・研究者データベース「日本の研究.com」を運営している(株)バイオインパクト・代表取締役・杉原氏からも講演を頂くことで、本セッションテーマである「研究力を伸ばす産学連携の新たな視点」について考えていく。

最後に、3者の特徴的な活動による講演を振り返りながら、従来のアカデミア中心の視点ではない視点から、研究そのものを活性化していくための方法や、その中でURAが果たす役割や可能性についてフロアと意見交換を行い、URA活動の新たな視点を築ければと考える。

## オーガナイザー

市田 秀樹: 信州大学 学術研究・産学官連携推進機構  
准教授(URA)



大阪市立大学大学院工学研究科応用物理学専攻修了(博士(工学))。専門は物性物理学。主に超短パルスレーザーを活用した物性計測に関する研究を実施。研究活動においては、異分野間の融合研究やレーザー光源開発にも携わる。教育活動では、産業界や地域社会を繋げながらのアントレプレナーシップ教育を中心に、大学COC事業などにも関わってきた。現在は、信州大学 学術研究・産学官連携推進機構にて、URA業務に従事している。和歌山県出身(1974年生まれ)。

林 靖人: 信州大学 学術研究・産学官連携推進機構  
准教授



1978年生まれ、愛知県出身。信州大学大学院総合工学系研究科修了(博士:学術)。専門は感性情報学。修士課程在学中から大学発ベンチャーの立ち上げに参画し、社会調査や行政計画等の策定に従事。現在、信州大学産学官連携・地域総合戦略推進本部長、キャリア教育・サポートセンター副センター長として研究・教育に関わりながら、地域貢献活動として地域の地方創生総合戦略等の策定や地域活性化活動に多数関わる。

講演者

高橋 修一郎: 株式会社リバネス 代表取締役社長 COO



東京大学大学院新領域創成科学研究科博士課程修了。博士(生命科学)。設立時からリバネスに参画。大学院修了後は東京大学教員として研究活動続ける一方でリバネスの研究開発事業の基盤を構築。独自の研究助成「リバネス研究費」や未活用研究アイデアのデータベース「L-RAD」のビジネスモデルを考案し、産業界・アカデミア・教育界を巻き込んだオープンイノベーション・プロジェクトを数多く仕掛ける。文部科学省中央教育審議会大学院部会委員。文部科学省科学技術・学術審議会人材委員会委員。

杉原 淳一: 株式会社バイオインパクト 代表取締役



株式会社バイオインパクト代表取締役。各省庁や研究機関の科学研究費助成(ファンディング)情報と研究者情報やプレスリリースを組み合わせた国内最大級の研究課題・研究者データベース「日本の研究.com」を運営している。研究試薬・機器会社等の販売支援事業や、機械学習、自然言語処理を用い構築した、研究分野等の独自分析アルゴリズムを活用し、製薬企業等の産学連携マッチングやKOL探索サービス等を提供している。

柴藤 亮介: アカデミスト株式会社 代表取締役



首都大学東京大学院 博士後期課程単位取得退学。大学院在籍時に研究室が閉鎖的であることに問題を感じ、さまざまな分野の大学院生が集う交流会を企画。そのなかで、専門知識がなくても研究や研究者の魅力に感動できると確信し、2014年に研究者が研究アイデアを発信することで研究活動の自由度を広げることを目的とした「academist」を公開。インターネットを駆使した学問の発展手法について日々模索する。